

高校英語における経験学習のための教具開発とコミュニケーション分析

学校教育専攻

教育コミュニケーション コース

M09003G

三野宮 春子

背景と問題意識

コルブ (D. A. Kolb) は学習を「経験を交換することにより知識を創り出すプロセス」と定義し、「具体的な経験 (concrete experience) → 内省的な観察 (reflective observation) → 抽象的な概念 (abstract conceptualization) → 積極的な実験 (active experimentation) → 次の具体的な経験…」という経験学習 (EL) モデルを示します。これと対照的に、高校英語 (特に入試対策) では「普遍的に正しい知識の効率よい獲得」が強調されることが多く、「各自で解答 → マルつけ → 解説を聞く・読む → 暗記 → 次の問題」のパターンに陥りやすいことが批判の対象にもなっています。与えられた知識を使って決められた「正解」に辿り着くことばかり要求しながら、「なぜ生徒は自分で考えようとしらないのか」と嘆いているのかもしれませんが。本研究は、大学入試対策とも両立させながら、自律的な知識創出に繋がるような経験と省察に基づく学習を提供するための可能性を探究します。

文献の調査

はじめに 4 つの観点から文献を調査します。第 1 に、レウイン (K. Lewin)、デューイ (J. Dewey)、ピアジェ (J. Piaget) を起源とするコルブの EL モデルとその理念を理解し、いわゆる「詰め込み学習」や「体験学習」から明確に区別します。第 2 に、EL モデルを基調とす

る英語教育を実現するには、知識や言葉を、他者や本のなかに存在する実体としてではなく、主体と環境との相互作用のなかに立ち現われるものとして、捉えなおす必要があります。ソシュール (F. Saussure) やバルト (R. Barthes) などの構造主義思想に手がかりを求めます。第 3 に、経験学習と認知心理学の接点を探すために、市川伸一が中心となって展開する認知カウンセリングの理念と事例報告を考察します。さらに、心理学者たちによる文章読解に関する知見を探ります。最後に、ロジャーズ (C. Rogers) の来談者中心療法や、デシ (E. L. Deci) の内発的動機付け理論を軸に、共感的理解と学習者中心について考えます。

教具の開発

本研究では、3 つの基本方針に沿って開発し、レッスンで使用した教具のなかから、「単語カード」と「読解ボード」を紹介します。題材は、大学入試センター試験問題から得ています。1 つめの基本方針は、教具の操作を介して学習者の思考が可視化されるように、語句や象徴や教具自体を可動化することです。教科書や問題集の語句や文章は、紙面に固定されていますが、それらが動かせるようになれば、テキストと学習者の主体の相互作用が、教師にも学習者自身にも把握しやすくなると予測します。また、殆どの場合、単語を覚えたり文章を読んだりする

ときの思考過程は学習者個人の内部で起こりますが、それが可視化されれば、共有もされやすくなると思われます。2 つめは、アフォーダンス理論に則り、教師が支持や助言を最小限に抑えても、学習者自らが教具との対話のなかで活動のしかたを見いだしてゆけるような仕掛けを、教具のなかに忍ばせておくことです。3 つめは、教材の複雑さを損なわず、ゲーム性の高い学習活動での利用を想定した教具開発です。

方法と成果

公立高校 3 年生（計 20 人）の協力を得て計 800 分のレッスンをを行い、音声・映像記録からトランスクリプトを作成して分析・解釈を行いました。レッスンに先立ち、教材研究、レッスンプランの作成、米国バーモント州にある School for International Studies で 2 週間のコース受講、などの準備を行いました。

研究の 2 つの目的と、それぞれにおける主な成果は、以下のとおりです。

(1) EL モデルへの接近を目指してレッスンを行い、その特徴と課題を洗い出すこと。

EL モデルの各行程を描写し、特徴や留意点などを考察します。経験学習の知識や技術はもちろん大切ですが、絶対不可欠なのは、それを使う人がいかに世界観を変容させられるかという点です。教師が受容・共感・非指示などを自らに徹底して、学習者が安全を感じられる学習環境を整えられないと、教師の期待する答ばかり気かけ、環境と相互作用する自分の声を聞き取ることができず、よって、経験から意味や概念を取り出すことは不可能になります。

経験学習を支援するための留意点のなかで、筆者が最も大切だと感じたうちの 1 つは、待つ

工夫です。思考を深めるには十分な時間が必要ですが、教師にとっては生徒の沈黙の意味が判断できにくいことも多いので、ターンの取得と放棄の方法を工夫し設定するなどの手立てが効果を発揮します。本研究では、米国原住民に伝わるウェイ・オブ・カウンシル(way of council)などが非常に役立ちました。

(2) 教具使用に媒介された生徒と教師のコミュニケーションの特徴を記述すること。

トランスクリプトには、生徒たちが積極的に教材と対話する様子がよく表れています。たとえば、ただ「神経衰弱をしてください」と言われて裏返しの単語カードを渡された生徒たちは、詳細なプレー方法もわからないままカードを 2 枚めぐり、そのたびにプレー方法と単語の知識を少しずつアフォードされました。

読解ボードの学習では、将棋かチェスゲームのに、打ちつつある 1 手とボード全体のピースの配置を見比べながら、パチンとピースを置きます。1 ゲームごとに、学習者たちは次々と新しいムーブに熟達していきました。

教師が考える「生徒のための教育」を推し進めたときと、「生徒にとっての学習」を教師が理解しようとしたときとでは、微妙ながら大きなコミュニケーションの違いが生まれます。

主要参考文献

Kolb, D. A. (1984). *Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development*. New Jersey: Prentice-Hall.

主任指導教員 安部 崇慶
指導教員 宮元 博章